

7月・8月の管理ポイント

高温、乾燥、高湿度、強光… 様々なストレスを抱えるベントグラスにとって厳しい時期です。
 ストレス対策をしっかりと行い、夏を乗り切りましょう。



高親水性 土壤用界面活性剤

バイタルドロップ

高親水性のバイタルドロップは、散布時に葉の表面や浅い層の撥水性土壤に付着する量が少なく、深い層まで素早く届いて処理層を形成します。散布液が高濃度になる少量散布でも高い効果が得られます。ドライスポットの予防と治療、どちらの目的でも使用できる利便性の高い土壤用界面活性剤です。

ドライスポットの予防 使用量：1ml/m²/月 散布水量100ml/m²以上

ドライスポットの治療 使用量2ml/m² 散布水量100ml/m²以上



高温ストレスから
ベントを守る

ヒートファイター

ヒートファイターは、夏の厳しい暑さをベントグラスが生き延びる為のお勧め資材です。有効成分「ゼルンボン」が細胞を刺激することで植物自体が持つ高温耐性が活性化、通常では弱体化・致死してしまう程の高温でも生き延びられるようになります。梅雨明け前からの予防処理で、ヒートファイターの効果を最大限得られます。

使用量：0.5ml/m² 散布水量：100-500ml/m² 散布間隔：14日



強光ストレス予防

インターセプト

梅雨が明けると一気に日差しが強くなります。ベントグラスにとって強すぎる太陽光は強光ストレスを引き起こす原因となります（過剰に取り入れた光により活性酸素が発生し細胞が傷つけられる）。インターセプト処理で、強すぎる光（ベントグラスが吸収する波長の可視光、紫外線）をカットし、強光ストレスを軽減しましょう。

使用量：1000-2500倍 散布水量：100-500ml/m² 散布間隔：7-10日



根の生育しやすい
土壤環境を整えましょう

レボ

夏は台風やゲリラ豪雨などの短時間で大量の降雨が予想されます。レボは排水性が高く表層土壤の水分値を低めに保つため、過湿状態になりがちな梅雨時期にも気相をしっかりと保ちます。定期散布を行い根の生育しやすい土壤環境を整えましょう。土壤水分を高めたい場合はプライマーセレクト、発生したドライスポットの治療にはアクアダクトをご使用下さい。液肥などとのタンクミックスにはグリーンシナジーがおすすめです。

使用量：2ml/m²/月 散布水量：200ml~500ml/m² 散布回数：1ヶ月に1回~2回



スポット処理に最適

ハイドレーターG

乾燥が気になる箇所に手軽に処理できる、粒剤タイプの界面活性剤資材です。ドライスポットの予防と治療にご使用ください。降雨前に散布し、後散水の手間を省く省力散布がおすすめです。1mm程度の粒剤なので散布しやすく、5mm程度の散水で溶けます。張芝した箇所の乾燥対策にも効果的です。花壇や鉢植えにもご使用頂けます。

グリーン・ティー 使用量：ドライスポットの治療 20g/m²/週 予防10g/m²/月

バンカー周り・クラブハウス周辺の芝地等 使用量：10g/m²/月

花壇・鉢植え・プランター 使用量：約10Lのプランターに小さじ1/2/月



サッチの除去
土壤環境の健全化

サッチクリーナー

サッチ成分のセルロース・ヘミセルロースを分解する酵素を主成分とした、酵素タイプのサッチ分解剤です。酵素そのものを散布するため即効性に優れており、サッチ分解量をコントロールすることが可能です。液剤であるため取扱いやすく、フィルターに詰まりません。農薬との混用や近接散布も可能です。梅雨入りまでに土壤の透水性や通気性を改善しましょう。土壤微生物のが活発な時期なので、微生物タイプのサッチ分解剤「サッチ・マネージャー」もおすすめです。使用量：グリーン0.2ml/m² ラフ・FW・Tee0.1-0.2ml/m² 散布水量0.2-0.5l/m²



土壤中の有害物質除去

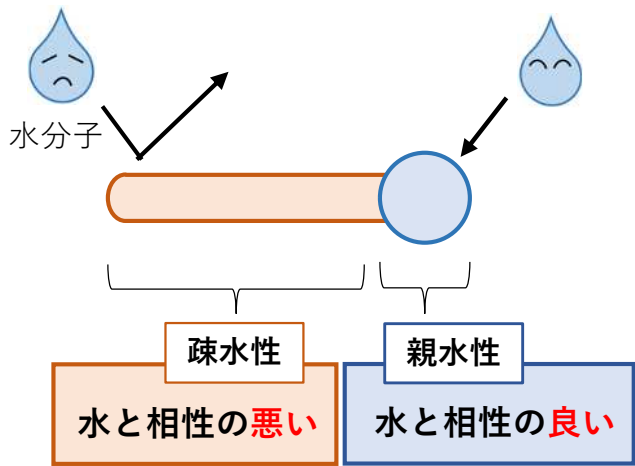
光合成細菌

過湿状態の土壤中に発生しやすい硫化水素やメルカプタンなどは、イヤな臭いがするだけでなく根を痛めます。光合成細菌を処理して有害物質を除去しましょう。光合成細菌は硫化水素などを分解するだけでなく、他の有用微生物の餌となるアミノ酸やATP、ADP（高エネルギーリン酸化合物：補酵素）などを分泌し、有用な土壤微生物の住みやすい環境を作ります。サッチ分解剤と組み合わせると、サッチを効率よく分解できます。

使用量：1~2ml 1l/m²散布 月1~2回

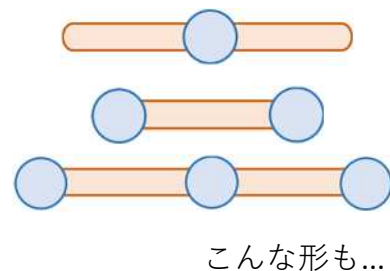
土壌浸透剤の主成分である界面活性剤。今回は、その構造と安全性との関係をご紹介します。

○ 界面活性剤は、主に2つのパーツでできています。

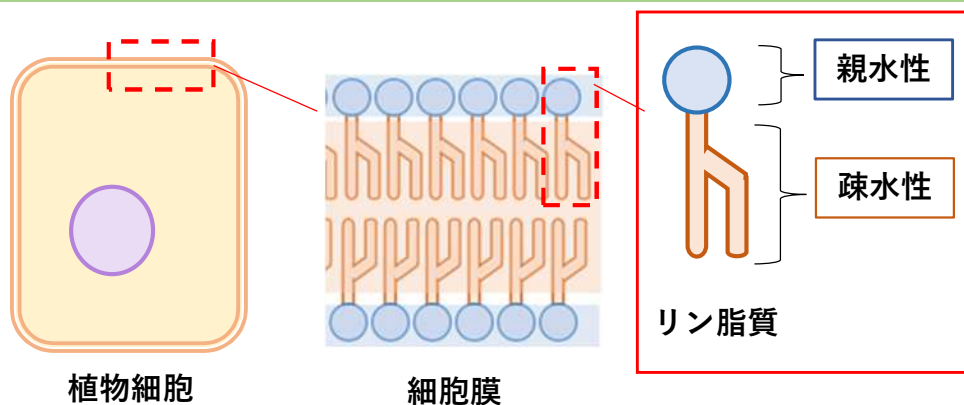


この相反する2つの性質を持つことで、浸透剤は土壌の撥水性（＝疎水性）を改善し、散水を浸透させます。

左図の構造を基本に、界面活性剤の構造には多くの種類があり、その性質や効果も異なります。



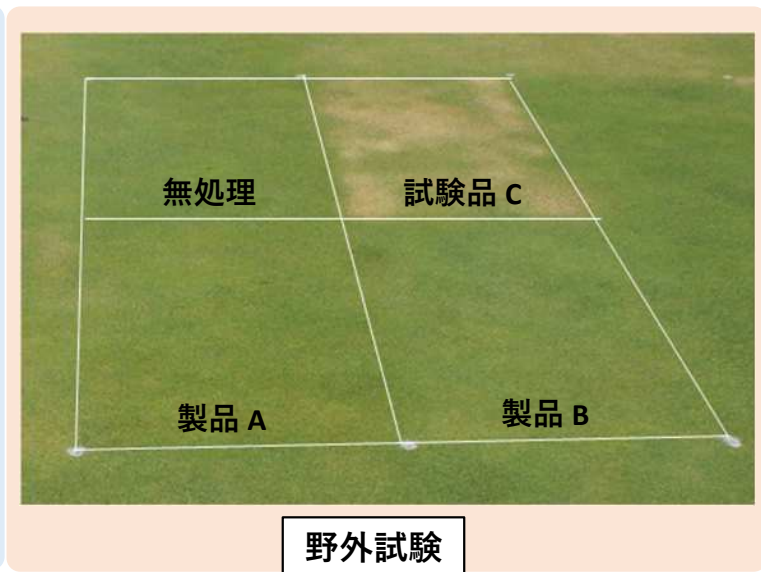
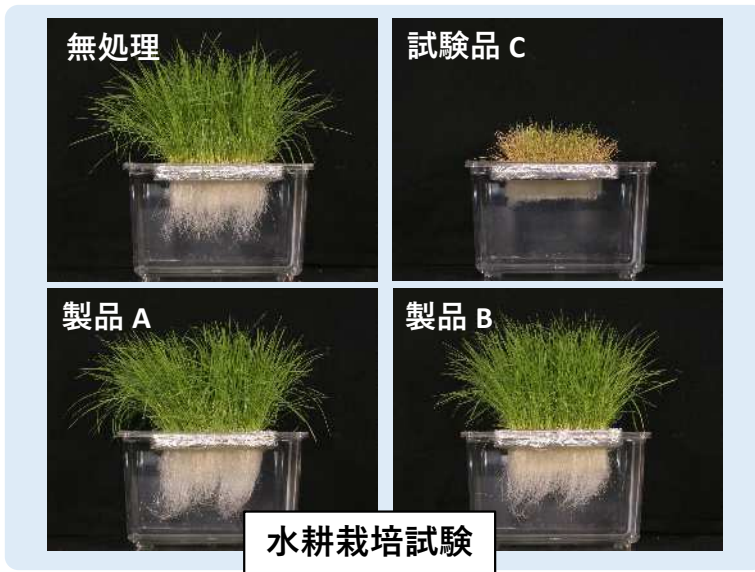
○ 一方、植物細胞を取り囲む「細胞膜」の構造を見てみると...



細胞膜を構成する「リン脂質」も2つの性質を持っています。

土壌浸透剤の界面活性剤は、リン脂質と構造が似ているため、細胞膜の機能を損ねてしまい、「**薬害**」を生じる可能性があると考えられています。

○ 弊社では芝に対する薬害の試験を行い、「安全性の高い製品」を開発しています。



界面活性剤の種類によって、薬害を生じやすいもの（図中試験品C）と、安全性の高いもの（図中弊社製品A、B）があります。また、芝生を傷めないためには、安全性の高い製品を選ぶだけでなく、薬剤散布後の散水をすることでも薬害を軽減することができます！

※ なお、界面活性剤には非常に多くの種類があり、使用量や散布方法、散布時期などによっても効果は異なります。したがって今回ご紹介した内容が必ずしも当てはまるとは限りません！